

# スロラニユ通信

## NPO Srolanh Project

### 2015

第6号カンボジア活動報告版

平成27年11月23日発行  
 特定非営利活動法人  
 スロラニユ プロジェクト  
 〒655-0049  
 兵庫県神戸市垂水区狩口台  
 4丁目31-505  
 srolanhproject@gmail.com  
 080-4766-0790(代表:飯塚)

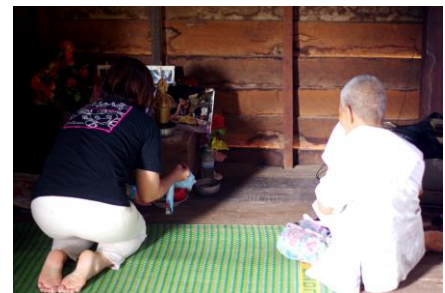
## 「チョムリアップスオ」ご挨拶 NPOスロラニユプロジェクト代表 飯塚

日頃のご支援ご協力ありがとうございます。この度10月9日にカンボジアにメンバー他9名で行って来ました。短い期間でしたが、スロラニユ小学校やシェムリアップ孤児院センター、そして、支援を行っている子どもたちの村々へ赴き、各人が精一杯活動を行いました。そして(有)なひた様からのサンダル。(有)真辺新聞舗様からの電卓、(有)小田原商事様からの衣類、そして焼肉『七輪』様からのこども達へのサッカーユニフォームをカンボジアの皆様へプレゼントさせていただきました。ありがとうございます。今回の通信ではメンバーそれぞれの活動報告とともに、それぞれの思いを文字にしました。



## 見守ってもらえるということ プロジェクトメンバー 歯科医師 大森

2月に現地に行ってから、8ヶ月の間に、支援していた障がい児が二人も川の向こう岸に渡って行った。チャンニーさんとリックくんは、二人とも若くして、あっという間にあの世に逝ってしまった。今回の活動では二人の仏前にお参りすることも目的の1つだった。



ボクは歯科医なので、支援している障がい児の口腔ケアを担当していて、二人の歯についてもそれぞれ思い出がある。職業柄、どうしてもボクの記憶には口の中の様子が残ってしまう。あの人はこんな歯だったなあ、あの歯で苦労したなあ、というふうに覚えている。チャンニーくんもリックくんも歯にトラブルを抱えていたので、彼らのお母さんたちもボクのことを歯に結びつけて覚えてくれていた。

カンボジア語で「歯」は「トメニユ」、「痛い」は「チュー」で「チュー・トメニユ」とボクはつながっているのだ。痛みから救うことができたかという点では十分ではなかったかもしれないけれど、お母さん方がボクのことを覚えてくれていたことは確かです。イメージの善し悪しはさておき、うれしいことである。

今回も障がい児デイ・サービスで、みんなの口腔ケアをさせてもらった。お母さんと向かい合って、膝の上でブラッシング。お母さんは嫌がる子ども



もの手を押さえながら、見守っている。つまり、ボクもお母さんに見守ってもらっているわけだ。もしかしたらかなりインパクトがある行為で、そのためお母さんの記憶に残るのかもしれない。

見守ってもらいながら何かをするということは、子どもにとってとても大切で、親の愛情を強く感じる状態だろう。言葉はいらぬ。ただ見守ってもらえていたらいい。ほめてもらえなくても、見てもらっていることが重要なのである。

見守ってもらえてうれしいのは子どもだけではない。大人だってうれしい。関心を持って見てくれている人の存在は、とてもありがたい。思いがけない人を見てくれていて驚くこともある。

ボクは歯科という自分の持ち場のほかは、写真撮影が自分の役目だ。ファインダー越しに、障がい児や、スロラニユ小学校の子どもたちや、孤児院の子どもたちを見守る。活動記録としての写真はもちろん、より美しく、よりドラマティックに瞬間を切り取れば、と思いつつシャッターボタンを押す。難しいけれど、ステキな表情が撮れたときは本当にうれしい。下手な鉄砲も数打ちゃ当たることもある。

写真を撮って、それを発信して大勢の人に見てもらうことによって、見守ってくれる人が何倍にも増える。たくさんの人に子どもたちを、そして我々を見守ってもらえることで、団体の活動が支えられる。



両親に先立たれたパットくんは、自力で歩くことも、会話を交わすこともできない。二人の妹と3人暮らし。上の妹は働きに出ていて、下の妹がパットくんの身の回りのお世話をしている。親に見守ってもらいたい年頃の子供が、すでに見守る立場になっている。

3人兄妹の暮らしが少しでもよくなればと思う。ここはただ見守っているというだけじゃなく、積極的な介入が必要だ。喫緊の課題として、飯塚代表が向き合っている。そんな代表の姿を、ボクたちメンバーは見守っている。

スロラニユ・プロジェクトはメンバーが相互に見守り合っているのが特徴かもしれない。ボクが行う歯科の活動を見守ってくれる人がちゃんという。これはとても力になる。

参加しても自分にはできないから、と二の足を踏まれる人は多い。いやいや、そんなことはないですよ、と思う。仏前に手を合わせることはできるし、そばにいて、黙って見守って下さるだけで、ボクなんかはとても励みになる。今回も見守ってくれる人の存在があって、大きなパワーをいただいた。

チャンスがあれば、ぜひ一緒にしましょう。何かしら、役割はあります。それより、生の臨場感を味わってほしいなと思います。きっと何かが変わります。ついでに、ちょっと見守ってもらえたら。

## 救急救命講習を終えて プロジェクトメンバー 救急救命士 高橋

2013年7月から始まった急病や不慮の事故、怪我に対する救命講習も2015年10月の活動で計8回目の指導となった。



滞在初日2015年10月10日のスロラニユ小学校内での講習は、翌日11日から13日の間、カンボジアではプチュン・バンといって、日本というお盆でした。7回目の指導がお盆の1日前の10日で学校も夏休み中にもかかわらず、コムルー村村長はじめ役場の職員、ドントロー小学校校長はじめ教職員21名が受講されました。受講者の中には2回目の教諭もおられ、初めての受講者に胸骨圧迫の手技を教え合う姿もあり、同じことの繰り返しではあるが、継続することにより身につくもので、今後も指導的立場にある教職員に何度も繰り返し習得してもらうことにより、小さな救える命を救うことができるかと確信した。

滞在2日目、11日には、孤児院入所年長児と孤児院で行われていたパソコン教室を受講している近隣の子



ども達が参加予定であったが、お盆ということもあり参加者が少なく、主に孤児院入所年長児への2回目の指導となった。幸いというか、孤児院の年長児たちへの指導は、一歩進んだ少し中身の濃い指導をと考えて



いたので、前回の復習から始まり、器具を使った呼吸管理までの指導となった。胸骨圧迫の必要性と手技については、2回目ということもあってか、指導者と受講者には顔の見える関係も出来て、現地スタッフのパンナさんによって、私の伝える日本語の専門用語にもかかわらず、即座にカンボジアに合った言葉に変えて通訳してもらったおかげで、応急手当の重要性や絶え間ない胸骨圧迫も十分に理解されたことは、本当に心強く感じられた。

人工呼吸にあっても、初めて目にする口対口の手技には最初は恥ずかしがってなかなか人形に触れなかったが、一人の受講生をあの手この手で誘い恥ずかしがりながらも行った後は全員実施することが出来た。今後も、継続的に実施し、将来孤児院を退院して職に就く際に役に立ってもらえればと期待します。

初めて救命講習を実施したのが2年前、言葉や生活習慣の違う中での指導に不安を抱えながら、専門用語が入った資料を作り、指導方法についてもカンボジアでも通じるのかなどパンナさんやメンバーたちの力を借りて無事第1回目の講習を終えたこと。

今思えば国は違えども、命の大切さに国境や言葉の壁なんか無く、愛「愛する」要するに srolanh (スロラニユ) があれば伝わるものだというを受講者であるカンボジア人から教えてもらった。

近い将来、学校の教員や孤児院の年長者と共に、学校の授業の中で「愛の救命講習」を行っていることを夢見て、今後も地道ではありますがスタッフの力を借り、また、受講者から学んだことを身につけ繰り返し指導を行っていきたいと思いました。

## 私にできること

プロジェクトメンバー元教師 須藤

今回の活動では、スロラニユ小学校で支援の必要な子どもが4人いるので、その子ども達に必要な教材を用意することから始まりました。

特別支援の教材として業者が売っているものは、あまりに高く手が出ないので、あちこちの100円均一の店を回り、教材として使えそうな物を搜しました。4人の子ども達が、どの程度の支援があれば自立学習ができるのか全く分からない中で、とりあえずは、形の認識、目と手の協応、指先の巧緻性など、文字や数の学習に必要な能力を養う物を搜すと、結構使えそうな物が見つかりました。それを利用して手を加え、教材として持って行きました。担任のティーダ先生によると、みんなと同じ学習ができず、寝てしまったり立ち歩いたりして困っているということなので、自分の出来ることがあれば、みんなと同じように授業中座って



いられるのではないかと思います。

活動初日、休み中にもかかわらず、子ども達をわざわざ呼んで集めて下さっていたティーダ先生の熱意に感心しながらも、持って行った教材がどの程度役に立つのか、ドキドキしながら机の上に出しました。ティーダ先生にやり方を説明し、子ども達の前に置くと、突然カラフルなおもちゃを与えられたような感じになり、それぞれの教材に喜んで取り組み出しました。



ウレタンでできた乗り物や果物のパズル、ホワイトボードの枠に見本通りに4色の磁石を並べる物、洗濯バサミを指示通りに挟む物、卵型のパズルなど、実際にやって見せると、やり方は理解できたようでした。ティーダ先生が隣の教室で行われている救急救命の講習会に行った後も、通訳のピッチさん、飯塚代表らと一緒に、褒めたり励ましたりしながら教材を与え、それぞれのこどもの取り組みの様子を見ました。

パニャン君(15歳)は形の認識や手先の巧緻性はますます。見本通りにカラーの磁石を並べるのは、苦戦。何より、自分に自信がなく、出来ないと思ったことは避けようとする。出来ることを増やして褒め、自信を持たせることが大切。

ソーム君(11歳)は色の違いは理解出来ている。パズル、磁石並べ共に苦戦。周りの子供たちが応援し、出来ると一緒に喜んでいたのでみんなの受け入れは良さそう。集中力に欠け、すぐに飽きてしまうため、小さな課題を複数用意し、休憩しながら取り組み、集中できる時間を少しずつ長くしていく必要がある。

ソッカー君(11歳)はパズル、磁石並べ共に苦戦。形の認識が不十分。おとなしく、課題に黙々と取り組む。繰り返し取り組む中で、形の認識も進み、出来ることも増えると思う。笑顔が、あまり見られなかった。楽しく学習できるものを用意し、意欲的に取り組ませたい。

ピン君(8歳)は4人の中では、一番、パズル、磁石並べともによく出来た。ティーダ先生に「本当に支援がいる子？」と尋ねたぐらいの出来でした。持って行った教材が、彼には簡単すぎた。読み書き計算が出来ないのかも。円形脱毛症になっていたため、自分に自信がなく、周りの評価を気にしすぎるのかも。自信を持たせたいと強く感じた。



## スロラニユプロジェクト支援活動に参加して

元教師 廣瀬佐和子氏

「ブカイ！ブカイ！」

と、私がピッチさんに教えてもらったばかりのほめ言葉を言うと、ソーム君は恥ずかしそうにほほ笑んだ。さっきから取り組んでいた乗り物パズルの最後のピースがぴったり嵌った瞬間だった。船や電車をどっちに嵌めたらいいのか試行錯誤しながら上に向けたり、下に向けたりしながら取り組んでいた。もしかしたらこのパズルの乗り物を見たことないかもしれないのだから無理もないなあと思いながら、私はもどかしい気持ちで見守っていた。

次に、卵のパズルを促すと肯いたのでチャレンジしてもらった。一度に何個も出すと難しそうなので初めは、3個のペアでやってみた。形をしっかりと見て凸凹を合わせることがなかなか飲み込めないようだったが、何度か同じペアを嵌めたり外したりしているうちに分かってきたのかだんだん速くできるようになった。そこで、残りのペアを出してやってもらったら、凸凹の形状を確かめながらやれるようになってきていた。一つ出来るたびに



私が、「ブカイ！ブカイ！」と覚えたてのクメール語で言うので、周りで見ている子たちもソーム君の方に来て窓から、「違う！！」「こっち！！」（多分そう言っているんだろうと思った。）と指さしてアドヴァイスしはじめた。卵のパズルを全部やり遂げた時、窓の外で見ていた他の子どもたちが思わずソーム君に拍手してくれたので彼は私に「ブカイ！」と言われるよりももっとうれしそうにニコニコしていた。

その後、ピンちゃんがやっていた磁石並べもソーム君にチャレンジしてもらったが、2枚目をやったところで彼の集中力が切れてきたようだった



のでおしまいにした。

日本のように「これから始めます」などという挨拶もなく、教材を出して子どもといっしょに何となく「プカイ！プカイ！」と言っているうちに終わってしまった。初めてだったので、ティータ先生や須藤さんがしていることを見ながらお手伝いしたのだが、手伝いになったかどうか実のところ不安だった。久ぶりに子どもたちに囲まれて一番楽しい時間を過ごしたのは私だったのかもしれない。

後から考えると、スロラニユ小学校は、まだ旅の入り口でしかなかった。私は、この後メンバーの方に連れられてデイサービスに来ている子どもたちや今年短い命を閉じたチャンニー君、リッ君たちの家庭、孤児院の子どもたちを訪問する機会を得たが、子どもたちの置かれている劣悪な環境、圧倒的な『貧困』に打ちのめされた。

床も踏み抜きそうな傾いた家のテラスの手すりにつかまっているパット君を初めて見たとき、正直言って余りの劣悪な環境と『貧困』（容易に溶かせない）にたじろいでしまった。彼を直視できない自分がそこにいた。何だか「さあ、貴女はどうする？」と踏み絵を突き付けられたようなそんな気持ちだった。「何かしてあげたいなあ。」と思って呑気な気持ちでいた自分に何の力もないこと、「何かしてあげたい。」じゃなく、パット君から「何ができるのか」と問われているような気がした。



のではないかと、そう考えると、スロラニユプロジェクトの今回の活動計画もストンと胸におちた。全ては、個から始まっているのがわかった。日々の計画のいたるところに固有名詞が溢れていた。一人ひとり固有名詞で語られ、希望を紡ぎ、個に応じた支援がされていた。短い命を精一杯燃やしたであろうチャンニー君やリッ君の仏前にお参りしたのもきっと個に寄り添うというスロラニユプロジェクトならではの考えからに違いないと理解した。

ソペア君と通訳のピッチさんのいるホー村（だと思のですが）を後にしながら、トウクトウクの車窓（・・・窓というところちょっと違うかな。）から、天を仰いで茂る椰子の樹木



やはるかかなたまで続く水田が広がる景色を見ていると、3年前のカンボジアの旅は何だったのだろうと思わずにはいられなかった。前は、アンコールワットを観光けれど、そこに生きている人をちっとも見ていなかったなあ。

今回、こんなプロジェクトに参加する機会を紹介して下さった須藤さん、何をしていたのかもわからないままに参加した私を受け入れて下さった飯塚さん、石倉さん、大森先生、服部さん、高橋さん、細川さん、本当にありがとうございました。オークン、チュラーン！！



飯塚さんのパット君と彼の妹達への献身的なケアを間近にして、「どうしてここまでできるのか。」と驚くとともに、「ここまで踏み込んでいいのかなあ。」と懐疑的な思いも湧いてきた。

パット君の家庭訪問をした夜、寝付けなかった。飯塚さんや石倉さんの献身的な姿、あの圧倒的な『貧困』に一步も引かない姿勢、どうしてだろう、何がそうさせるのだろうと言葉を探した。そして、ふと、「一人を助けられなくてどうして大勢を助けることができるだろう？」という言葉に私なりに行きついた。飯塚さんたちはこういう思いをもってスロラニユプロジェクトをしている

## スロラニユプロジェクト支援活動に参加して

大学生 細川将平氏

今回、初めてスロラニユプロジェクトに参加しました。カンボジアの子どもたちにとって一番大切な支援・配慮とは「人のぬくもり・暖かさ・愛情」であることを学びました。

メンバーの方々は笑顔絶えず楽しく活動していたのが印象に残っています。

またメンバーの一人ひとりが自分の持ち味を活かして子どもたちを支援していました。

シエムリアップ市内の学校や村で救命救急講習や歯科支援などを行うことにより、村人や子どもたち同士のつながりができ、村全体で子どもたちを支えていこうという意識が徐々に生まれていったのではないかと感じています。

教員になってカンボジアに行く機会があるかどうかはわかりませんが、継続して支援していくことの重要性を学んだこともあり、これからも何らかの形でスロラニユプロジェクトに携わりたいと考えています。



この度、支援活動滞在中に孤児院の全入所児童をダイバク（韓国料理店）にご招待してみんなでサムギョプサルを食べました！

たくさんの子ども達が来店して他のお客さま方は不思議そうに我々のテーブルを眺めている中、子ども達は出てくる焼豚肉やサラダ、キムチ等をおなか一杯しっかりと食べていました。いつも障がい児デイサービスの会場に孤児院を使わせていただき、そして日頃の慰労も兼ねて、栄養のある食事をみんなで楽しく食べられる時間が提供できたかなと思います。また、みんなで食事をしよう！

株式会社シークルー様より、井戸建設支援金をご寄付して頂きバンゴア村に14基目となる井戸を建設させていただきました。

井戸提供家族概要：夫ラン・リー（58）、妻ミイン・レイ（53）、子どもは7人いますが、現在は4人の子ども達と一緒に住んでいます。両親ともに農業で生計を立てています。

株式会社シークルー様ありがとうございました！！



## 2015年10月度スロラニユプロジェクト支援活動

活動期間10月10日～13日

- ・スロラニユ小学校（特別支援教育、教諭及び役場職員対象の救急救命講習）・コムルー村（歯科支援）
- ・孤児院センター（障がい児デイサービス、障がい児歯科支援、入所年長児童対象の救急救命講習）
- ・その他、バンゴア村井戸視察、障がい児宅訪問支援

参加者：左から細川氏、石倉、廣瀬氏、大森、須藤、服部氏、飯塚、ピッチ氏、高橋、パンナ ※ピンク字スロラニユメンバー

